

停留精巣のすべて

小児から成人への架け橋

企画にあたって

小学生の頃、股間を蹴られると男子は“のたうち回る”ほど痛いのに、女子は大して痛がらないのを見て、人間の身体は不公平にできているなと思いました。当時は金曜日の夜8時からTVでプロレスをやっていました。優勢に攻め続けていたガッチリした体格のレスラーが、悪役レスラーに股間を蹴られた（金的）だけでうずくまってしまう防戦一方になるのがお約束でした。子ども同士のプロレスごっこで一番の決め技は雷電ドロップと玉蹴りでした。不思議なのは局所の痛みよりも腹痛が強いことでした。

それから50年経った今、プロレス少年は小児泌尿器科外来を開いています。その診察室で停留精巣の説明をするときには、「胎児期にお腹にある精巣が、血管や精管だけでなく神経も引き連れて陰嚢に降りてきます。だから蹴られると神経の出所のお腹が痛くなるのです」と説明しています。患児の父親からは「やっと謎が解けました!」と信頼を得ていますが、神経学的な研究をしたわけではないので本当のところは解りません。ガマの油売りみたいだと自分自身にあきれています。

「でも先生、どうして精巣を袋の中に降ろさないと不妊症になるのですか?」と母親から質問されると、待ってました!とばかりに「お腹の中は体温の37℃ですが、陰嚢内は2~4℃ほど温度が低いんです。低温のほうが精巣の成長にはよいのです。お風呂で2℃上がるとかなり熱いと思いませんか?」と説明します。すると母親は、「早く手術して治したほうがよいのですね」と言ってご理解されます。

でも私は心の中で、「本来大切な臓器は体内の骨や筋肉に囲まれて守られるべきだから、停留精巣のほうが子孫繁栄には適した状態ではないのかな?」と悩み始めます。生物の起源を海の中に求めるなら、魚類は体内に精巣を保持しています。ぶらぶら陰嚢をぶら下げた魚は見たことがありません。「水の中だから体温を低く保てるから、停留精巣でも不妊症にならずにすむのだな」などと考えると、「体表に大事な精巣をぶら下げたほ乳類が地球上の生物の頂点に座り続けるのは奇跡なのだな」と感じたりもします。しかし、地球温暖化は進みます。今年は酷暑で7月にすでに気温が40℃

を超えました。つまり、体温よりも気温が高いのです。外気に近い陰嚢内の精巣より停留精巣のほうが低温を維持できるというパラドックスが起きています。

実際には、精巣固定術を受けた方でも不妊症外来を受診されます。温度環境以外に停留精巣には根源的な問題があるわけです。それは泌尿器科における重要な研究テーマになると思います。

さて、「停留精巣の治療の目的は、陰嚢内に精巣がないとボディイメージが損なわれるから、精巣を陰嚢内に収納することで男子としての心理的充足感を持たせることだ」という考えもあります。しかし、本特集を読んでいただければ、停留精巣は不妊症と悪性化という問題を抱える疾患であると再確認していただけたと思います。不妊症となるリスクを下げるためには早期手術が必要ですが、もし成人して不妊症になったとしても補助生殖医療により妊娠に至ることは可能です。その治療を産科の先生とタイアップして行っているのは泌尿器科医です。また、たとえがん化しても腹腔内ではなく陰嚢内に精巣があれば、早期発見・早期治療が可能です。運悪く多臓器に転移していたとしてもがん化学療法を行うのは泌尿器科医です。すなわち、停留精巣の出生時罹患率が数%だとしても、その男子の一生に責任をもつのは私たち泌尿器科医なのです。本特集を読んで、泌尿器科医としてのアイデンティティを再認識してください。

名古屋市立大学大学院医学研究科
小児泌尿器科学分野

林祐太郎